

## 1 平成 21 年度 河川のモニタリング調査（動植物等調査）結果の概要

### 【全体像・ねらい】

「河川のモニタリング調査」は、かながわ水源環境保全・再生実行 5 ヶ年計画の諸事業の実施と併せて、水源環境保全・再生に係る施策評価や施策展開の方向性を検討するための基礎資料を得るための調査である。本調査は、H19 年度～H23 年度にかけて相模川(H20)、酒匂川水系（H21）における動植物等を調査し、必要な時系列データを収集するとともに、県民参加のもとで利用目的等に応じた多様な指標を選定し調査する。

### 【H21 年度調査結果（酒匂川水系）の概要】

#### （1）河川の流域における水質及び動植物等調査

○調査地点：酒匂川水系 40 地点（本川、支川、溪流を含む）（サンショウウオ類のみ 25 地点）

○調査項目及び回数：動植物調査（年 2 回）、水質調査（年 12 回）

項目	内 容
水質	●年平均値：BOD 0.8mg/L、SS 1.9mg/L、全窒素 1.1mg/L、全リン 0.046mg/L →いずれも上流で低く下流で高い傾向があった。経月変化をみたところ季節的な傾向は認められなかった。
動植物	底生動物 ●確認種数：467 種類（主にユスリカ、カゲロウ等の昆虫） →底生動物を主眼とした平均スコア法及び EPT 指数で評価した結果、平均スコア値及び EPT 指数ともに、上流で高く下流ほど低くなる傾向があり、上流ほど河川環境が良好であることが示された。
	魚類 ●確認種数：31 種類（主にコイ科、ハゼ科） →魚類の代表種としてカジカは中・上流域の調査地点で確認。
	両生類 ●確認種数：10 種類（カエル類 8 種、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオ） →両生類の代表種としてカジカガエルは中・上流域の調査地点で確認。サンショウウオ類は主に源流に近い地点で確認。
	鳥類 ●確認種数：25 種類 →河川の鳥類の代表種としてカワセミは源流部を除く酒匂川流域で広く確認。 水辺に生息する鳥類：夏季に比べ冬季が種類数が多かった。
	植物 ●確認種数：834 種類 →帰化種（外来種）は 150 種、アレチウリ等 4 種の特定外来種が出現。帰化率は上流の地点で低く、下流で高い傾向があった。
	付着藻類 ●確認種数：120 種類（うち約 83%が珪藻類） →中・上流の地点で種類数が多い傾向があった。 DAIpo（有機汚濁指数）で評価した結果、DAIpo は上流で高く下流ほど低くなる傾向があり、上流ほど水質環境が良好であることが示された。

## (2) 河川水質の多様な指標による評価（県民参加型調査）

- 調査地点及び時期：相模川流域・酒匂川流域や都市部の支川を含む任意の地点及び時期
- 調査項目及び方法：底生動物・魚類・植物・「今後の河川水質管理の指標項目（案）」に基づく項目について、県民から参加者を募って実施
- 参加者：60名（8団体と個人の合計）
- 水質調査結果：全ての地点（6地点：相模川の中上流4地点、酒匂川の中上流2地点）においてBランク（A:30%、B:70%）以上（“川の中に入って遊びやすい程度※”）

（※「今後の河川水質管理の指標について（案）」国土交通省河川局河川環境課より）

## 2 平成22年度 河川のモニタリング調査（動植物等調査）実施計画

### (1) 河川水質の多様な指標による評価（県民参加型調査）

- 調査地点及び時期：相模川及び酒匂川水系（本川、支川、溪流を含む）、随時
- 調査項目：水生生物（底生動物、魚類、水生植物等）、水質及びその他の指標（水温、COD、導電率、pH、ゴミの量、透視度、川床の感触、におい）について、県民から参加者を募って実施
- 調査のすすめ方：①県民から参加者を公募（約70名）②専門家による事前研修を実施③調査④結果のとりまとめ及び参加者との意見交換会を開催

### (2) 補完調査（河床底質環境調査等）

- ねらい：水源河川の水量の安定化や土壌流出などによる河川環境の変化が水生生物の分布などに与える影響を把握する。
- 調査地点：相模川及び酒匂川水系の各40地点
- 調査内容：河川の地形的、地質的特性及び河床底質環境調査等（河川地質の解析、河床の構造、底質の礫サイズ構成等）